

海産魚類養殖技術研究

(予算区分 県単独 研究期間 平成17～18年度)

担当：水産試験場沼津分室

【研究の背景とねらい】

海面養殖業の維持、振興を図るため、魚病対策、新魚種開発、漁場環境などの問題点について検討を加えました。

【研究成果】

- ・マアジの細菌性疾病に関する研究では、マアジの病魚から未知の細菌が分離され、産業的に問題となる可能性が考えられたために、その診断技術及び対策について検討しました。この細菌は、性状と遺伝子の系統解析から国内の魚類で未報告の新しいレンサ球菌で、マアジに対して強い病原性を持つこと、現在市販されている薬剤で投与効果がみられることが分かりました。
- ・新養殖魚種開発研究では、多品種少量生産に対応した新魚種としてムツの養殖試験を行いました。ムツの稚魚は地先の定置網で漁獲されますが、これを養殖用種苗として使用し、市販の配合飼料を用いて約1年半飼育し、商品サイズとして想定される500g近くまで海面生け簀で育てることができ、基本的な養殖技術が確立できました。
- ・水質環境調査を1か月に1回、12測点、4水深で行いました。溶存酸素量は夏～初冬に低く、湾奥の漁場の方が低い傾向がありましたが、養殖場として問題のない程度でした。化学的酸素消費量は有機物による環境の汚濁度合いを示しますが、6～8月に高く、漁場による違いはありませんでした。貧酸素水塊の動向調査では、酸素不足による養殖への影響はないと考えられましたが、表層と底層の水温差が最大7.6あり、湧昇により水温の急激な変化があった場合に養殖魚に被害を及ぼすことが考えられました。

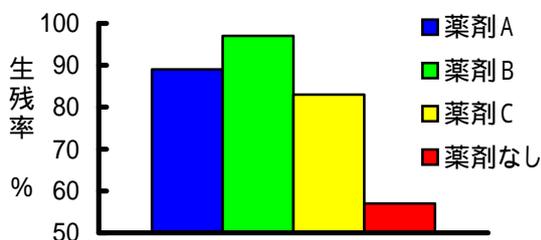


図1 新しいレンサ球菌症に感染したマアジに対する薬剤投与試験結果

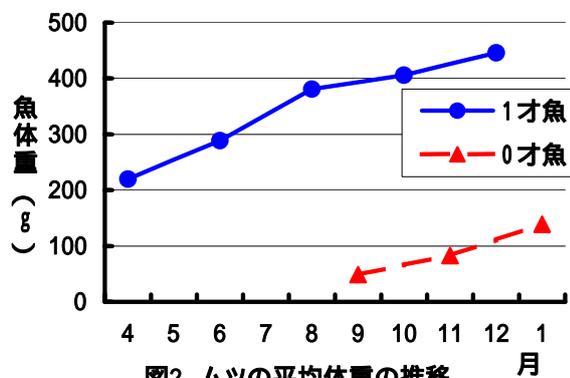


図2 ムツの平均体重の推移

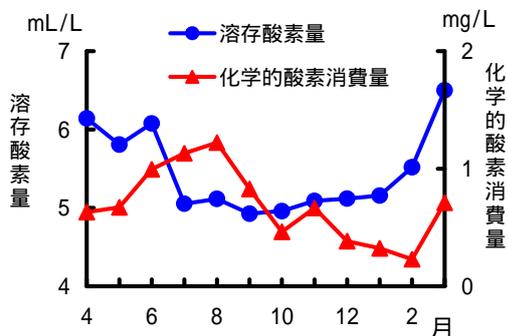


図3 養殖漁場の溶存酸素量及び化学的酸素消費量の平均値の推移



写真1 海面の生け簀で養殖した出荷サイズのムツ

【研究成果の普及方法】

- ・得られた成果は、養殖業者を対象とした講習会や巡回等により、普及指導を図ります。
(作成 平成19年3月)